

# 《ランスへの旅、または金の百合亭》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』(日本ロッシニー協会紀要)第14号(1999年9月発行)の拙稿「ロッシニー全作品事典(9)《ランスへの旅》」。その後何度か増補改訂しましたが、今回新たなヴァージョンとして日本ロッシニー協会HPに掲載します。(2015年3月)

## I-35 ランスへの旅、または金の百合亭 *Il viaggio a Reims, ossia l'Albergo del Giglio d'oro*

**劇区分** 1幕のドラマ・ジョコーゾ (dramma giocoso in un atto)

註：ロッシニー自身は書簡と自筆楽譜でカンタータと位置づける。

**台本** ルイージ・バローキ (Luigi Balocchi [註], 1766-1832) 単幕全25景、イタリア語

註：初版台本と全集版に準拠。但し、音楽関係の書誌や従来の文献は Balocchi を採用している (例：ICCU 目録)。

**原作** なし (バローキはスタール夫人の小説『コリンヌ、またはイタリア』から着想を得たが、《ランスへの旅》の物語はバローキの創作であり、スタール夫人の小説を原作とすることはできない。【作品の】成立参照)

**作曲年** 1825年4～5月頃 (→【作品の】成立)

**初演** 1825年6月19日 パリ、イタリア劇場 (Théâtre Italien) [王立イタリア劇場 (Théâtre Royal Italien) / サル・ルーヴォア (Salle Louvois)]

註：イタリア劇場は一般名称。当時の正式名称は Théâtre Royal Italien (王立イタリア劇場) で、会場を限定する意味では Salle Louvois (サル・ルーヴォア) の付記が望ましい。

**人物** 註：以下、Contessa、Cavalier など貴族の称号の頭大文字は全集版に準拠。

- ①コリンナ Corinna (ソプラノ) ……著名なローマの女流即興詩人
  - ②メリベアー侯爵夫人 La Marchesa Melibea (コントラルト) ……ポーランドの貴婦人でイタリアの将軍の未亡人。夫は結婚式当日に敵に襲われ死んでいる。
  - ③フォルヴィル伯爵夫人 La Contessa di Folleville (ソプラノ) ……若い未亡人。陽気で愛嬌があり、流行を追う
  - ④コルテーゼ夫人 Madama Cortese (ソプラノ) ……金の百合亭の女将。ティロルの生まれで機知に富む
  - ⑤騎士ベルフィオーレ Il Cavalier Belfiore (テノール) ……愉快でエレガントなフランスの若き士官。あらゆる女性を口説くが、とりわけフォルヴィル伯爵夫人に御執心。絵画が趣味
  - ⑥リーベンスコフ伯爵 Il Conte di Libenskof (テノール) ……ロシアの将軍。メリベアー侯爵夫人に恋しており、衝動的な性格でとても嫉妬深い
  - ⑦シドニー卿 Lord Sidney (バス) ……イギリスの大佐、コリンナを密かに愛している
  - ⑧ドン・プロフォンド Don Profondo (ブッフォ) ……文学者でコリンナの友人。さまざまなアカデミーの会員で熱烈な骨董蒐集家
  - ⑨トロンボノク男爵 Il Barone di Trombonok (ブッフォ) ……ドイツの陸軍少佐で音楽狂
  - ⑩ドン・アルヴァーロ Don Alvaro (バス) ……スペイン大公。メリベアー侯爵夫人に恋している
  - ⑪ドン・プルデンツィオ Don Prudenzio (バス) ……温泉宿の医者
  - ⑫ドン・ルイジーノ Don Luigino (テノール) ……フォルヴィル伯爵夫人のいとこ
  - ⑬デリア Delia (ソプラノ) ……コリンナに保護されているギリシアの孤児で旅の道連れ
  - ⑭マッダレーナ Maddalena (メゾソプラノ) ……ノルマンディーのコー生まれ。温泉宿の女中頭
  - ⑮モデスティーナ Modestina (メゾソプラノ) ……内気でぼんやりした少女。フォルヴィル伯爵夫人の小間使い
  - ⑯ゼフィリーノ Zefirino (テノール) ……郵便配達人
  - ⑰アントーニオ Antonio (バス) ……金の百合亭の支配人
  - ⑱ジェルソミーノ Gelsomino (テノール) ……給仕
- 他に、4人の旅芸人、男女の農民たち (合唱)、男女の庭師たち (合唱)、召使たち (合唱)、男女のバレエ・ダンサー、宿の旅人の召使たち

**初演者** 註：印刷台本にフルネームの記載が無く、脇役の歌手に関して文献間に異同がある。以下のフルネームとその表記は筆者の判断で採用したもの。

- ① ジュディッタ・パスタ (Giuditta Pasta, 1797-1865)
- ② アデライデ・スキアッセッティ [スキアセッティ] (Adelaide Schiassetti [Schiassetti], 1802-?)
- ③ ラウラ・チンティ [ロール・サンティ]=ダモロー (Laura Cinti [Laure Cinthie]-Damoreau, 1801-63)
- ④ エステル・モンベッリ (Ester Mombelli, 1794-1860 頃)
- ⑤ ドメーニコ・ドンゼッリ (Domenico Donzelli, 1790-1873)
- ⑥ マルコ・ボルドーニ (Marco Bordogni, 1789-1856)
- ⑦ カルロ・ズッケッリ (Carlo Zucchelli, 1793-1879)
- ⑧ フェリーチェ・ペッレグリーニ (Felice Pellegrini, 1774-1832)
- ⑨ ヴィンチェンツォ・グラツィアーニ (Vincenzo Graziani, ?-?)  
註：フランチェスコ・グラツィアーニとする文献は誤り。
- ⑩ ニコラ=プロスペル・ルヴァッスール (Nicholas-Prosper Levasseur, 1791-1871)
- ⑪ ルイージ・プロフェーティ (Luigi Profeti, ?-?)
- ⑫ ピエーロ [またはピエートロ]・スクード (Piero [Pietro] Scudo, 1806-64)
- ⑬ マリーア・アミーゴ (Maria Amigo, ?-?)
- ⑭ ? [カテリーナまたはマリアンナ]・ロッシ (? [Caterina or Marianna] Rossi, ?-?)
- ⑮ ニーナ・ドッティ (Nina Doty [Dotti], ?-?)
- ⑯ ルイージ・ジョヴァノーラ (Luigi Giovanola, ?-?)
- ⑰ フェルディナンド・アウレッタ (Ferdinando Auletta, ?-?)
- ⑱ トレヴオ (Trévaux, ?-?) 註：フルネーム不詳

**管弦楽** ピッコロ/フルート、2 フルート、2 オーボエ、2 クラリネット、2 ファゴット、4 ホルン、2 トランペット、3 トロンボーン、セルペントーン [N.9のみ]、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、鐘、バンダ・トゥルカ、ハーブ、弦楽 5 部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

**演奏時間** 約 135 分

**自筆楽譜** 全曲のまとまった自筆楽譜は存在せず、《オリー伯爵》に転用された楽曲の自筆楽譜はその出版社トルプナによって破棄されたと推測されている。但し N.1~N.5、N.7 の 6 曲は自筆楽譜から筆写されたものがパリ国立図書館（音楽院セクション）で、《オリー伯爵》に転用されなかった楽曲の自筆楽譜 [註] はローマのサンタ・チェチーリア音楽院で発見された (N.3、N.4 のシェーナとプリモ・テンポ、N.8、冒頭合唱を除く N.9 さらに N.2、3、5、7、8 の後のレチタティーヴォ)。

註：表紙にロッシニ自筆で「カンタータ ランスへの旅の数曲 Alcuni Brani della Cantata Il Viaggio a Reims」と書かれている。

**初版楽譜** Fondazione Rossini, Pesaro, 1999. [総譜。下記全集版]

Casa Ricordi [BMG Ricordi], Milano, 2006. [ピアノ伴奏譜。下記全集版に基づく]

**全集版** I / 35 (Janet L. Johnson 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1999.)

**構成** (全集版に基づくが、フィナーレの構成を別記)

### 【全 1 幕】

N.1 導入曲 〈急いで、急いで…さあ、しっかり！ Presto, presto... su, coraggio!〉 (コルテーゼ夫人、マッダレーナ、ドン・ブルデンツィオ、アントーニオ、合唱)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ 〈私も行きたいけれど Partire io pur vorrei〉 (コルテーゼ夫人、フォルヴィル伯爵夫人、マッダレーナ、モデスティーナ、ドン・ルイジーノ、トロンボノク男爵、ドン・ブルデンツィオ)

N.2 レチタティーヴォ 〈ひどいぞ！ 危機に瀕しておる… Ahimè! sta in gran pericolo...〉 (フォルヴィル伯爵夫人、ドン・ルイジーノ、トロンボノク男爵、ドン・ブルデンツィオ) と伯爵夫人のアリア 〈ああ！ 私は出発したいのです Partir, oh ciel! desio〉 (フォルヴィル伯爵夫人、マッダレーナ、モデスティーナ、ドン・ルイジーノ、トロンボノク男爵、アントーニオ、ドン・ブルデンツィオ)

— アリアの後のレチタティーヴォ 〈ああ！ ちょっと、アントーニオ君… Eh! Senti mastro Antonio...〉 (アントーニオ、トロンボノク男爵)

N.3 六重唱 〈いかにも、狂人の入った大きな檻と Sì, di matti una gran gabbia〉 (コルテーゼ夫人、メリベアー侯爵夫人、リーベンスコフ伯爵、ドン・アルヴァーロ、トロンボノク男爵、ドン・プロフォンド; コリナ)

— 六重唱の後のレチタティーヴォ 〈ゼフィリン [ゼフィリーノ] [註] が戻ってこないわ… Zefirin non ritorna...〉 (コ

ルテーゼ夫人) 註:全集版に準拠。通例、ジェルソミーノとされる。

- N.4 シェーナ〈ああ! なぜ彼女と知り合ってしまったのか Ah! perché la conobbi?〉とシドニー卿のアリア〈むなしくも心から引き抜こうとするが *Invan strappar dal core*〉(シドニー卿、合唱)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈卿、ちょっとお話が…*Milord, una parola...*〉(コリンナ、デリア、シドニー卿、ドン・プロフォンド)
- N.5 レチタティーヴォ〈やっと女神が一人のところを見つけた *Sola ritrovo alfin la bella Dea*〉、コリンナと騎士ベルフィオーレの二重唱〈かのお方の神々しいお姿には *Nel suo divin sembiante*〉(コリンナ、騎士ベルフィオーレ)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈いいぞ、色男 [ガニメーデ] [註] 氏! *Bravo il signor Ganimede!*〉(ドン・プロフォンド) 註:ガニメーデはギリシア神話の美少年ガニメデスを指し、転じて若い色男を意味。
- N.6 ドン・プロフォンドのアリア〈ドン・プロフォンド。私だ! 他に類のないメダル *DON PROFONDO. Io! Medaglie incomparabili*〉(ドン・プロフォンド)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈騎士をお見かけになりました? *Vedeste il Cavaliere?*〉(フォルヴィル伯爵夫人、リーベンスコフ伯爵、ゼフィリーノ、トロンボノク男爵、ドン・アルヴァーロ、ドン・プロフォンド)
- N.7 十四声の大コンチェルタート [Gran Pezzo Concertato a 14 voci] 〈ああ! かくも思いがけぬなりゆきに *Ah! a tal colpo inaspettato*〉(コルテーゼ夫人、フォルヴィル伯爵夫人、コリンナ、メリベア侯爵夫人、デリア、モデステーナ、リーベンスコフ伯爵、騎士ベルフィオーレ、ゼフィリーノ、トロンボノク男爵、ドン・アルヴァーロ、シドニー卿、ドン・プロフォンド、ドン・ブルデンツィオ)
- 大コンチェルタートの後のレチタティーヴォ〈伯爵夫人のご意見は賢明なものと思われます *Savio della contessa il consiglio mi pare*〉(コルテーゼ夫人、フォルヴィル伯爵夫人、メリベア侯爵夫人、リーベンスコフ伯爵、騎士ベルフィオーレ、ジェルソミーノ、アントーニオ、トロンボノク男爵、ドン・アルヴァーロ、ドン・プロフォンド)
- N.8 シェーナ〈私にどんな咎がありまして? *Di che son reo?*〉、メリベア侯爵夫人とリーベンスコフ伯爵の二重唱〈気高き魂を、おお神よ! *D'alma celeste, oh Dio!*〉(メリベア侯爵夫人、リーベンスコフ伯爵)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈なにもかも整った *Tutto è all'ordin*〉(マッダレーナ、ジェルソミーノ、アントーニオ)
- N.9 フィナーレ〈楽しみこそが至上の善 *L'allegria è un sommo bene*〉(トロンボノク男爵、メリベア侯爵夫人、リーベンスコフ伯爵、ドン・アルヴァーロ、シドニー卿、フォルヴィル伯爵夫人、騎士ベルフィオーレ、コルテーゼ夫人、ドン・プロフォンド、コリンナ、ドン・ブルデンツィオ、モデステーナ、デリア、ジェルソミーノ、マッダレーナ、ゼフィリーノ、ドン・ルイジーノ、アントーニオ、合唱)

註:全集版は便宜的に次のように区分。

バッロ [Ballo]

合唱〈楽しみこそが至上の善 *L'allegria è un sommo bene*〉(合唱)

合唱後 [のレチタティーヴォ] 〈では、習慣に従って乾杯しましょう *Ora secondo uso, i brindisi facciamo*〉(トロンボノク男爵)

ドイツ賛歌 [Inno Tedesco] 〈諸国民の間に支配するいま *Or che regna fra le genti*〉(トロンボノク男爵、合唱)

ポラッカ [Polacca] 〈栄光の従者たる勇敢な戦士たち *Ai prodi guerrieri, seguaci di gloria*〉(メリベア侯爵夫人、合唱)

ロシア賛歌 [Inno Russo] 〈榮譽、栄光と敬意を *Onore, Gloria ed alto omaggio*〉(リーベンスコフ伯爵、合唱)

スペインのカンツォーネ [Canzone Spagnola] 〈いと高き指導者に敬意を *Omaggio all'augusto duce*〉(ドン・アルヴァーロ、合唱)

イギリスのカンツォーネ [Canzone Inglese] 〈金の樹の愛されし芽を *Dell'aurea pianta il germe amato*〉(シドニー卿、合唱)

フランスのカンツォーネ [Canzone Francese] 〈新たなアンリの母 *Madre del nuovo Enrico*〉(フォルヴィル伯爵夫人、騎士ベルフィオーレ、合唱)

ティロレーゼ [Tirolese] 〈より生き活きと、さらに豊かに *Più vivace e più fecondo*〉(コルテーゼ夫人、ドン・プロフォンド、合唱)

即興歌 [Strofe d'Improvisato] 〈金の百合の陰で *All'ombra amena del Giglio d'or*〉(コリンナ)

ストレッタ [Stretta] 〈万歳、直系のいと高き統治者 *Viva il diletto augusto regnator*〉(コルテーゼ夫人、フォルヴィル伯爵夫人、コリンナ、メリベア侯爵夫人、デリア、モデステーナ、リーベンスコフ伯爵、騎士ベルフィオーレ、ジェルソミーノ、トロンボノク男爵、シドニー卿、ドン・アルヴァーロ、ドン・プロフォンド、合唱)

物語 (時の指定なし [註]。場所は「金の百合」の看板を掲げたブロンビエールの温泉宿)

註:指定なしでもランスの大聖堂におけるシャルル10世聖別式の前日(1825年5月28日)と認める。

フランスの温泉地ブロンビエールの宿屋「金の百合亭」。湯治のため滞在するヨーロッパ各国の名士たちが、シャルル 10 世の戴冠式に行われるランスに向かうことにする。金の百合亭の女中頭マッダレーナが張り切って使用人たちを急かしている。宿の侍医ドン・プルデンツィオは食事をチェック。女主人コルテーゼ夫人は自分もランスへ行けたらいいのと思いつつ、使用人たちに細々と注意を与える。そこに現れたフォルヴィル伯爵夫人が衣装の届かないのを心配していると、伯爵夫人のいとこドン・ルイジーノが彼女の馬車の転覆を告げに来る。それを聞いた伯爵夫人は失神する (N.1 導入曲)。ドン・プルデンツィオは心臓発作と出鱈目な診断を下すが、伯爵夫人はすぐに意識を取り戻し、衣装がなければ出発したくてもできないと嘆き悲しむ。ところが小間使いのモデスティーナから帽子を届けられると有頂天になり、周囲を呆れさせる (N.2 レチタティーヴォと伯爵夫人のアリア)。

一行の財布を預かるトロンボノク男爵、骨董蒐集家ドン・プロフォンド、メリベアー侯爵夫人と彼女に恋するスペイン大公ドン・アルヴァーロが現れる。コルテーゼ夫人も加わり、大公が恋敵のロシア將軍リーベンスコフと睨み合っていると、不意にハーブの調べが聞こえる。ローマの女流詩人コリンナが即興的に歌う平和と友愛の頌歌を耳にして心が和んだ 6 人は、陽気さを取り戻す (N.3 六重唱)。一方、コリンナに恋する英国軍人シドニー卿は、彼女の部屋の傍らに花束を置いて恋の悩みを吐露し、永遠の愛を誓う (N.4 シェーナとシドニー卿のアリア)。

シドニー卿の花束を見たコリンナが物思いに耽っていると、騎士ベルフィオーレが現れ彼女に言い寄る。その歯の浮くような台詞にコリンナは軽蔑をもって応える (N.5 レチタティーヴォ、コリンナと騎士ベルフィオーレの二重唱)。ベルフィオーレがふられたのを知って大いに満足したドン・プロフォンドは、さっそく一同の所持品目録の作成に取りかかり、各国名士のさまざまな持ち物を注釈しながら読み上げる (N.6 ドン・プロフォンドのアリア)。

出発を目前に、トロンボノク男爵が悪い知らせをもたらす。ブロンビエールの馬がすべて押さえられ、一頭も調達できないというのだ。一同驚き慌てるが、そこに手紙を手にしたコルテーゼ夫人が飛び込んでくる。戴冠式の後に国王がパリに戻り、大規模な祝典が開かれるとの報せにフォルヴィル伯爵夫人が全員をパリの自宅に招待すると名士たちは喜び、ランス行きの費用を使ってここで宴会を開くことにする (N.7 十四声の大コンチェルト)。

リーベンスコフ伯爵が恋敵ドン・アルヴァーロに嫉妬したことを悔い、メリベアー侯爵夫人に求愛して受け入れられる (N.8 シェーナ、メリベアー侯爵夫人とリーベンスコフ伯爵の二重唱)。宴会の用意が整い、一同集ったところで旅芸人による余興の踊りが披露される。乾杯の辞に続いて各国の名士たちがそれぞれ自国の歌を披露し、ドイツ賛歌、ポロネーズ、ロシア賛歌、スペイン民謡、英国国歌、フランス民謡、ティロル民謡が歌われる。即興歌を求められたコリンナは主題を皆に出させ、くじ引きで「フランス王シャルル 10 世」が選ばれる。コリンナの見事な歌唱に一同感動し、王と金の百合 [フランス王家の紋章] の栄光を称える (N.9 フィナーレ)。

## 解説

### 【作品の成立】

1822 年のヴィーン訪問で自信を得たロッシーニは、翌 1823 年の《セミラーミデ》を最後に祖国イタリアに見切りをつけ、外国に新天地を求めた。同年 11 月 9 日にはロンドンへの途上パリに滞在し、熱烈な歓迎を受ける。パリの名士たちは同月 16 日にレストラン「ヴォ=キ=テット」で歓迎宴会を催し、「音楽芸術に新時代を拓いたロッシーニ」(ルシュールの祝辞)を称えた。スタンダールが翌年予定した『ロッシーニ伝』をこの訪問に合わせて出版したことで判るように、ロッシーニはパリで最も注目される流行児となっていた。そして 12 月 13 日から翌 1824 年 7 月 26 日まで 7 ヶ月間のロンドン滞在では、国王ジョージ 4 世に寵愛された。

フランス王家の命を受けたロンドン駐在フランス大使ジュール・ド・ポリニャック (Jules Auguste Armand Marie de Polignac, 1780-1847) がロッシーニと折衝し、4 万フランの報酬で 1 年間のパリ滞在与オペラ座 [王立音楽アカデミー] のための新作を作曲する契約が結ばれたのは 2 月 27 日。ロンドンを去ったロッシーニが 8 月 1 日にパリに戻ると王家の大臣ソステヌ・ド・ラ・ロシュフコー子爵 (Le vicomte Sostène de La Rochefoucauld, 1785-1864) からパリの王立イタリア劇場の監督も依頼され、9 月 12 日、ボローニャへの帰還の途に就いた<sup>1</sup>。この契約は 9 月 16 日のルイ 18 世崩御と新王シャルル 10 世 (Charles X, 1757-1836. 在位 1824-30) の即位でいったん宙に浮くものの、ロッシーニは王家の意を受けて 11 月初頭に再度パリを訪れ、同月 25 日、年 2 万フランの報酬で王立イタリア劇場の音楽舞台監督 (Directeur de la musique et de la scène du Théâtre Royal Italien) を務めるとともに新作から別途報酬を受ける契約が結ばれた<sup>2</sup>。



スタンダール『ロッシーニ伝』(筆者所蔵)



シャルル 10 世

当時パリには、オペラ座 (Opéra) [王立音楽アカデミー劇場 (Théâtre de l'Académie Royale de Musique)、王立イタリア劇場 (Théâtre Royal Italien)、オペラ=コミック座 (Opéra-Comique) が三大劇場として存在し、法律によって上演内容が規定されていた。パリにおけるロッシェニ作品上演は 1817 年の《アルジェのイタリア女》に始まり、イタリア語でオペラを上演する王立イタリア劇場ではロッシェニが音楽監督に就任する 1824 年末までの約 8 年間に合計 14 のオペラが初演されていた (別表参照)。王家が最初にロッシェニに求めたのはオペラ座のためのフランス・オペラで、オペラ座理事会は台本作家ヴィクトル=ジョゼフ・エティエンヌ・ド・ジュイ (Victor-Joseph Étienne de Jouy, 1764-1846) に《山の老人 (Le vieux de la montagne)》と題した台本を作成させ、11 月 3 日の審査で受理したそれがロッシェニに渡されていた (11 月 12 日付のオペラ座理事会からロッシェニへの書簡)<sup>3</sup>。だが、並行して新国王シャルル 10 世の戴冠を祝う作品が浮上する。翌 1825 年 2 月 7 日、パリの全劇場に王の戴冠祝いの機会作品を制作上演する提案がセーヌ県知事で祝賀行事の企画責任者シャブロール・ド・ヴォルヴィック伯爵 (Gilbert-Joseph-Gaspard Chabrol de Volvic, 1773-1843) によってなされ、王家の意向として諸劇場に伝達されたのである<sup>4</sup>。

王立イタリア劇場によるロッシェニ作品パリ初演
《アルジェのイタリア女》1817年2月1日
《幸せな間違い》1819年5月13日
《セビーリヤの理髪師》1819年10月26日
《イタリアのトルコ人》1820年5月23日
《トルヴァルドとドルリスカ》1820年11月21日
《試金石》1821年4月5日
《オテッロ》1821年6月5日
《泥棒かささぎ》1821年9月18日
《イングランド女王エリザベッタ》1822年3月10日
《タンクレーディ》1822年4月23日
《ラ・チェネントラ》1822年6月8日
《エジプトのモゼ》1822年10月20日
《リッチャルドとゾライデ》1824年5月25日
《湖の女》1824年9月7日

王立イタリア劇場の機会作品の台本は、1802 年からイタリア劇場や皇妃劇場の詩人・舞台監督を歴任するルーイジ・バローキ (Luigi Balochi, 1766-1832) に依頼され、彼はスタール夫人 (Madame de Staël [Anne-Louise Germaine Necker, baronne de Staël-Holstein], 1766-1817) の小説『コリンヌ、またはイタリア (Corinne ou l'Italie)』(1807 年) から《ランスへの旅》の人物や劇の着想を得た。それゆえオペラのコリンナは小説のコリンヌ、シドニー卿は小説のネルヴィル卿オズワルド (Oswald Lord Nelvil) と理解しうるが、にもかかわらず『コリンヌ』を原作と位置づけることはできない。なぜなら《ランスへの旅》の物語はコリンヌとネルヴィル卿の恋を交えながらも、ナポレオンの敗北で開かれた 1815 年のヴィーン会議とその各国代表者、ギリシア革命とスペイン革命を收拾すべく開かれた 1822 年のヴェローナ会議、そしてランスでのシャルル 10 世戴冠という王政復古を象徴する出来事を巧みに織り込み、これを独自に劇化したからである。その結果、オペラのコリンナはスタール夫人、フォルヴィル伯爵夫人はレカミエ夫人 (Juliette Récamier)、騎士ベルフィオーレはタレイラン、リーベンスコフ伯爵はロシア皇帝アレクサンドル 1 世、シドニー卿はカスルリー子爵 (Robert Stewart)、トロンボノク男爵はメッテルニヒのパロディと解釈しうる<sup>5</sup>。

ロッシェニがいつ台本を受け取ったかは不明だが、4 月 11 日付の父宛の手紙に「ぼくはいま、来月演奏されるだろうフランス王の戴冠用のカンタータを作曲中で、フランス語のグラントペラにも着手しました」と記している (カンタータは《ランスへの旅》、グラントペラは《山の老人》を指すと推測)<sup>6</sup>。王立イタリア劇場の音楽舞台監督就任からまだ 4 か月しか経っていないが、ロッシェニはその間にロシュフコー子爵とオペラ座理事会の信任を得て歌手のオーディションや起用に関する助言を行っていた。オペラ座理事会が 4 月 24 日付でラ・ロシュフコー子爵に宛てた手紙には、ロッシェニが《山の老人》を検討するかたわら「聖別式のための小品 (une petite pièce pour le Sacre)」を作曲中とあり<sup>7</sup>、初演は当初 6 月 15 日に予定され、関係者は題名を《温泉地 (Bagni)》と称している (作曲家アレッサンドロ・ミシュルーのジュディッタ・パスタ宛の書簡、5 月 7 日及び 11 日付。5 月 11 日の時点ですでにたくさんの楽曲が王立イタリア劇場の筆写者の手に渡っており、非常に美しい三重唱と二重唱、十四もしくは十八声のナンバーのあることが関係者に知られていた)<sup>8</sup>。ほどなく初演日が 6 月 19 日で確定し (5 月 23 日付のエティエンヌ・ペロのパスタ宛書簡<sup>9</sup>)、歌手とオペラ座バレエ団のための衣装制作を含め、上演の準備が着々と進められていった。

シャルル 10 世は 5 月 24 日にパリを発ち、コンピエーニュを経由して同月 28 日ランスに到着し、翌 29 日、大聖堂で聖別式が執り行われた。そして 6 月 1 日にランスを発ち、同月 6 日パリに戻った。パリの劇場は 5 月 24 日から 15 日間の祝賀興行を行い、最終日となる 6 月 7 日は前日の王の帰還を祝して市民に無料で観劇させる措置が取られた。この 6 月 7 日は王立もしくは王家の五つの劇場の



ランスの大聖堂で行われたシャルル 10 世の聖別式

戴冠祝いの新作公演の始まりでもあり、シャルル 10 世は次の日程でこれを観劇した。

- ・6月10日、オペラ座——ボワエルデュー（第1幕）、ベルトン（第2幕）、クロイツァー（第3幕）共作の3幕のオペラ《ファラモン（*Pharamond*）》（音楽は旧作の改作。台本はアンスロ、ギロー、スメが各幕を作成）。戴冠祝賀の新作として6月7日に初演が予定されたが、準備が間に合わず10日に初演された。  
註：オペラ座はその埋め合わせとして6月7日に《アラダン、または魔法のランプ（*Aladin, ou la Lampe merveilleuse*）》（イズアールの遺作でベニンコーリが補筆完成。1822年初演）を上演したが、これは戴冠祝賀とは無縁の作品。
- ・6月11日、フランス座（Théâtre Français）——スメ作の悲劇『クリテンネストル（*Clytemnestre*）』とジェルサン及びテオロン共作の喜劇『農場と城（*La ferme et le château*）』。  
註：フランス座は戴冠祝賀にドラパルノー（Drap-Arnaud [Victor Draparnaud, 1773-1833]）作の3幕の悲劇【合唱付き】『ダヴィデの慈悲（*La Clémence de David*）』を6月7日に初演したが、あまりに評判が悪く、王の観劇にふさわしくないとして11日の演目が前記の悲劇と喜劇の再演に差し替えられた。
- ・6月14日、オペラ=コミック座——フェティス作曲の1幕のオペラ=コミック《ランスのブルジョワ（*Le bourgeois de Reims*）》（台本はメニシエとサン=ジョルジュ共作。1515年1月のランスを舞台にフランソワ1世を主人公とする）。戴冠祝賀の新作として6月7日に初演。
- ・6月17日、オデオン座（Théâtre de l'Odéon）——3幕のオペラ=コミック《ルイ12世、またはランスへの道程（*Louis XII, ou la Route de Reims*）》（台本と改作はサン=ジョルジュとド・ロレアル）。戴冠祝賀の新作としてモーツァルトほかの音楽で構成したパステイッチョ。戴冠祝賀の新作として6月7日に初演。
- ・6月19日、イタリア劇場（サル・ルーヴォア）——ロッシーニ《ランスへの旅》初演。  
註：イタリア劇場はこれに先立ち6月2日に《アルジェのイタリア女》、4日に《湖の女》、9日に《ラ・チェネレントラ》、11日に《エジプトのモゼ》、14日に《オテッロ》、16日に《セビーリヤの理髪師》を戴冠祝賀とは無縁に上演。

他にもパリの大衆劇場でさまざまな祝賀の新作が上演されたが【註】、真打に上演され大成功を収めたのはロッシーニの《ランスへの旅》であった。

註：主なそれに、アンビギュ=コミック座の1幕のディヴェルティスマン《ランスへの入場（*L'Entrée a Reims*）》、ジムナーズ=ドラマティック座の1幕のヴォードヴィル《貸し窓、または二人の家主（*Fenêtres à louer, ou Les Deux Propriétaires*）》、ゲテ座の2幕のヴォードヴィル《ランスへの旅（*Le Voyage à Reims*）》、ヴォードヴィル座の1幕のヴォードヴィル《女城主たち、または新たなアマゾネス（*Les Châtelaines, ou les Nouvelles Amazones*）》、ヴァリエテ座の1幕のヴォードヴィル《花の冠（*La Couronne des fleurs*）》、ポルト=サン=マルタン座の2幕のヴォードヴィル《イヴリの老人、または1590年と1825年（*Le Vieillard d'Ivry, ou 1590 et 1825*）》がある<sup>10</sup>。

## 【特色】

《ランスへの旅》の異色な点は、この作品がロッシーニ最後のイタリア・オペラであるとともに、フランス王シャルル 10 世の戴冠という特別な機会をとらえて作曲されたことにある。戴冠祝賀の作品は通常のオペラとは異なる目的を備え、作曲家としての力量を内外に示す良いチャンスでもあった。そして登場人物 18 人、十四声の大アンサンブルを持ち、うち 10 人の歌手（ソプラノ 3、コントラルト 1、テノール 2、バリトンとバス 4）を事実上の主役とする本作は、王立イタリア劇場の歌手全員の顔見世興行も兼ねていた。

パローキは台本をドラマ・ジョコーゾ（オペラ・ブッフファと同義）として書き下ろしたが、前記のように王政復古を象徴する政治社会的トピックを巧みに織り込んだ。筋書きは呆れるほど単純……プロンビエールの温泉宿に逗留する各国名士がランスで行われるシャルル 10 世の聖別式に列席しようとするが、馬を調達できず皆で大宴会を繰り広げる……ただそれだけである。シドニー卿がコリンナに恋心を抱き、リーベンスコフがメリベア侯爵夫人の愛を射止めるエピソードはあっても、劇の目的は最高のオペラ歌手が一堂に会して新たな王の誕生を祝うことにあった。それゆえロッシーニもドラマの流れに沿って主役歌手の特質を楽曲に反映させ、六重唱、十四声の大コンチェルト、フィナーレをそれぞれフィナーレに見立てて三部構成とした（印刷台本は1幕物とするが、初演に列席したスタンダードは3幕で上演されたと批評に記し、初演のピラにも幕数の記載がない）。

序曲はなく、音楽は次の九つのナンバーからなる（以下は、レチタティーヴォやシェーナを除いた楽曲解説）。

### 第1曲 導入曲〈急いで、急いで…さあ、しっかり！（*Presto, presto... su, coraggio!*）〉

金の百合亭の人物による劇の状況説明。女中頭マッダレーナが使用人を急かすアンサンブルと宿の女将コルテーゼ夫人のソロ「麗しい光に飾られ（*Di vaghi raggi adorno*）」からなる。コルテーゼ夫人役は1810年頃から面識のあったエステル・モンベッリ（Ester Mombelli, 1794-1860 頃。《デメトリオとポリービオ》リジンガ役の創唱歌手）が務

め、実質的なアリア「麗しい光に飾られ」は優雅な装飾歌唱によるアレグレットの前半部と、他の人物と合唱を伴う技巧的なヴィヴァーチェの後半部で構成される。

**第2曲** フォルヴィル伯爵夫人のアリア〈ああ！私は出発したいのです (*Partir, oh ciel! Desio*)〉

荷物が届かぬショックで失神した伯爵夫人が目覚めて歌うアリア。出発できないと大げさに嘆くアンダンテの前半部と、帽子が届いた喜びを華麗に歌うアレグロの後半部からなる。初演歌手ラウラ・チンティ[生名ロール・サンティ・モンタラン] (Laura Cinti [Laure Cinthie Montalant],1801-63) は7歳でパリ音楽院のソルフェージュ科に入学し、15歳を目前に王立イタリア劇場にイタリア風の芸名ラウラ・チンティ (Laura Cinti) でデビューして1821年にプリマ・ドンナに昇格した逸材 (続くロッシーニ4作のフランス・オペラ《コリントスの包囲》《モイーズ》《オーリー伯爵》《ギヨーム・テル》) の女性主役も彼女のために書かれた。

**第3曲**：六重唱〈いかにも、狂人の入った大きな檻と (*Si, di matti una gran gabbia*)〉

中間部にコリンナの美しい陰歌を挿入する規模の大きなアンサンブル (六重唱+コリンナのソロ)。開始部 (アレグロ・ジュスト、4/4拍子) に続く第二部分 (アンダンテ、4/4拍子) で旋律をカノン風を受け継ぎ、ドン・アルヴァーロとリーベンスコフの確執を浮き彫りにする。続くハープ伴奏の「優しい竖琴よ (*Arpa gentile*)」はコリンナが舞台裏で歌い、その旋律は《アルミーダ》(1817年)第3幕カルロとウバルドの二重唱〈穏やかな微風が (*Come l'aurette placide*)〉を転用改作している。心が和んだ6人によるアレグロのエネ르기ッシュな終結部は六重唱のカバレッタに相当する。コリンナ役の初演歌手ジュディッタ・パスタ (Giuditta Pasta,1797-1865) は1821年の《オテッロ》パリ初演でデズデーモナを歌い、スタンダードに「歌唱芸術の極致」といわしめた時代最高のプリマ・ドンナである (後にベッリーニ《夢遊病の女》《ノルマ》、ドニゼッティ《アンナ・ボレーナ》の初演歌手となる)。



ジュディッタ・パスタ

**第4曲**：シドニー卿のアリア〈むなしくも心から引き抜こうとするが (*Invan strappar dal core*)〉

技巧的なフルート独奏を伴うシェーナ〈ああ！なぜ彼女と知り合ってしまったのか (*Ah! perché la conobbi?*)〉でコリンナへの愛を独白したシドニー卿が歌うアリア。アレグロ・マエストーゾの前半部と、ポラッカのリズムによる農婦の合唱を伴うアレグレットの後半部からなる。

**第5曲**：コリンナと騎士ベルフィオーレの二重唱〈かのお方の神々しいお姿には (*Nel suo divin sembante*)〉

ベルフィオーレに言い寄られたコリンナがひどい侮辱と腹をたててもベルフィオーレは意に介さない、というすれ違いのデュオ。

**第6曲**：ドン・プロフォンドのアリア〈ドン・プロフォンド。私だ！他に類のないメダル (*DON PROFONDO. Io! Medaglie incomparabili*)〉

一行の所持品目録を作成するパルランテ [言葉を並べ立てる形式] のアリア。それぞれの国民性と言語への風刺を併せ持ち、表現の幅が広く変化に富む (4/4拍子、アレグロ・ジュストと3/4拍子、アレグロ [ヴィヴァーチェ] の二つの部分からなる)。

**第7曲**：十四声の大コンチェルト〈ああ！かくも思いがけぬなりゆきに (*Ah! a tal colpo inaspettato*)〉

三つの部分からなり、馬が調達できぬ驚きの叫び「ああ！」で始まる第一部分 (2/4拍子、アンダンテ・マエストーゾ) は無伴奏の十三重唱。手紙が届く中間部 (6/8拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ) を経て、伯爵夫人からパリに招待されて喜ぶストレッタ (4/4拍子、アレグロ・スピリトーゾ) で閉じられる。14人の歌手が駆使する華麗なアジリタ [敏捷な歌唱法] が圧巻で、初演批評でも絶賛された (【上演史】参照)。

**第8曲**：メリベアー侯爵夫人とリーベンスコフ伯爵の二重唱〈気高き魂を、おお神よ！ (*D'alma celeste, oh Dio!*)〉

急～緩～急の三部分からなり、リーベンスコフから情熱的に求愛されたメリベアーがこれを拒む第一部分 (4/4拍子、アレグロ・モデラート)、心が揺れてメリベアーが陥落する三拍子の第二部分 (3/4拍子、アンダンティーノ) と続く。愛の喜びを歌い上げるカバレッタ (2/4拍子、アレグロ) では、「Ah! no」「non ha」「no, no」「ancor」の短い言葉のやりとりと三度平行のハーモニーを用いて高揚する感情を官能的に表現する。

**第9曲**：フィナーレ〈楽しみこそが至上の善 (*L'allegria è un sommo bene*)〉

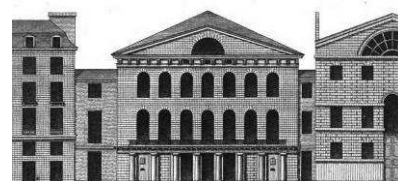
各国の歌の引用を含む大規模なフィナーレ。旅芸人を含む全員の登場と主要人物の着席、余興の舞踏を伴うバレエ音楽 [Ballo] で始まり (初演ではオペラ座バレエ団のメンバー40人が衣装をつけて踊った)、《マオメット2世》(1820年)第2幕の導入合唱〈狂ってますわ、花の盛りの年齢で (*È follia sul fior degli anni*)〉を転用した合唱〈楽しみこそが至上の善 (*L'allegria è un sommo bene*)〉が歌われる。乾杯の音頭に続く各国の歌は、ハイドン作曲《皇帝賛歌》を引用したドイツ賛歌、ポラッカ [ポーランド風の歌]、ロシア人作曲家カシン (Danila Kašin [または Daniil Nikitich Kashin],1769-1841) 作曲のアリア〈*Likuj Moskva*〉を引用したロシア賛歌<sup>1)</sup>、スペインのカンツオーネ、英国国歌〈神よ、王を守りたまえ (*God save the King*)〉を引用したイギリスのカンツオーネ、ウスターシュ・デュ・クロワ (Eustache Du Caurroy,1549-1609) 作曲のシャンソン〈可愛いガブリエル (*Charmante Gabrielle*)〉を引

用したフランスのカンツォーネ、ティロレーゼ [ティロル地方の歌] と続く。くじ引きで選ばれた「フランス王シャルル 10 世」をテーマにコリンナがハーブの伴奏で歌う即興歌〈金の百合の陰で (*All'ombra amena del Giglio d'or*)〉はロッシェーニの作曲した最も美しい装飾旋律の一つで、短調の部分に《マオメット 2 世》第 1 幕導入曲〈エリッソよ、あなたの命により集まりました (*Al tuo cenno, Erisso, accolti*)〉のコンドゥルミエーロの旋律を転用している。締め括りは伝統歌《アンリ 4 世万歳! (*Vive Henri IV!*)》のバラフレーズによるストレッタ〈万歳、直系のいと高き統治者 (*Viva il diletto augusto regnator*)〉で、シャルル 10 世とフランス王家への最高の賛辞と言える。

ロッシェーニは 1 幕のファルサでキャリアを始め、《アルジェのイタリア女》(1813 年) から《ラ・チェネレントラ》(1817 年) に至る作品でオペラ・ブッフアのジャンルを完成に導いた。《ランスへの旅》はその延長上に位置するが、祝典カンタータとしての独自性により「喜歌劇を超えた喜歌劇」「オペラを超越したオペラ」となっている。音楽の用法も《セミラーミデ》までのオペラ・セーリアで追及したベルカントの超絶技巧とは性格が異なり、フランス趣味に配慮した旋律の運びや構成になっている。テノールのアリアがなく、シドニー卿のアリアでは歌の技巧よりも繊細な感情表現が際立ち、コリンナの二つのソロは装飾歌唱の粋を凝らした旋律で完結し、カバレッタを持たない。その意味でロッシェーニ最後のイタリア・オペラとなる本作はこのジャンルの総括ではなく、フランス・オペラへの転換点と同時に出発点と位置づけられる。そのことは、《ランスへの旅》の楽曲転用で喜劇的フランス・オペラの名作《オリ伯爵》が成立したことで明らかであろう。

### 【上演史】

《ランスへの旅》の初演は 1825 年 6 月 19 日、サル・ルーヴォアで行われた (Salle Louvois。ルーヴォア通りに建築され、1791 年 8 月 16 日に開場した劇場。王立イタリア劇場による使用は 1819 年 3 月 20 日～25 年 11 月 8 日の約 6 年 8 か月で、1821 年 5 月 15 日から 1 か月間はオペラ座の代替劇場に使用された)<sup>12</sup>。初演に先立ちシャルル 10 世と王族のためのロイヤル・ボックスが臨時に設けられ、平土間のベンチは男女の観客や警備要員のために肘掛椅子に置き換えられた。開演は 19 時で、3 階ガレリア席と階段敷のチケットは当日正午から 14 時まで発売されると初演のピラに記されている (それゆえ非公開の上演ではない)。観劇したスタンダールは、次の批評を 6 月 21 日付『ジュルナル・ド・パリ (*Journal de Paris*)』に寄せた。



サル・ルーヴォア

長い間私たちがロッシェーニに求めていた類のオペラがようやく登場した。パリにいる歌手の声に合わせた音楽を提供してくれたのだ。それで、イタリア歌劇場ができて以来おそらく初めて、一流の歌手が全員そろって歌うのを聞くことになる。[中略] この壮麗な曲 [十四声の大コンチェルト] があるだけで、オペラ全体の成功が保証されたようなものだ。どこの劇場でもこんな (同質の十四人) を確保できはしないだろう。こういう難関を突破するにはイタリアの歌手がどうしても必要だ。昨日はどの歌手も曲の初めも終わりも音程が完璧だった。[中略] パスタ夫人の即興詩「心地よい影に」は夫人が出演した悲劇の中でも有数の美しい曲に匹敵する歌いぶりだった。パスタ夫人が歌手として、女優として、女性としてこれほど美しく見えたことはなかった。拍手が禁じられているせいで、いっそう観客の興奮が高まったようだった。 (山辺雅彦訳)<sup>13</sup>

同じ 6 月 21 日付『ラ・パンドール (*La Pandore*)』紙の批評も、「日曜日にオペラ=ブッフア座で上演された《ランスへの旅》はたくさんの成功を収めた。音楽はその作曲者にふさわしく、とりわけ十四声の曲が注目された」と記している<sup>14</sup>。それゆえ初演は大成功を収めたが、臨席したシャルル 10 世が明らかに退屈していたとのカスティル=ブラーズ証言もある<sup>15</sup>。一般の観客にとっても個々の音楽が長すぎたらしく、スタンダールは前記批評にフォルヴィル伯爵夫人のアリアが「よく書けてはいるものの三倍は長い」、コリンナと騎士ベルフィオーレの二重唱は「少々長すぎるが、それでも素晴らしく思えた」とし、全体に長いので作曲者も「大部分のアリアを短縮するほうがよい」と感じてくれるのではないかと述べている (同前)。パスタ夫人が演じたコリンナは、1822 年のサロン (絵画展) に出品され大好評を得た画家フランソワ・ジェラルド (François Gérard, 1770-1837) の油絵『ミゼーヌ岬のコリンヌ (*Corinne au Cap Mysène*)』 (現在はリヨン美術館に所蔵。図版参照) を想起させ、「[パスタ夫人は] まさにコリンヌ、より正確に言えばジェラルドが美化したコリンヌそのもの」と評された (『ジュルナル・デ・デバ (*Journal des débats*)』6 月 21 日付)<sup>16</sup>。



F.ジェラルド作『ミゼーヌ岬のコリンヌ』



ロッシーニの妻コルブランはロッシーニの父ジュゼッペ宛の手紙に、「私たちのジョアキーノのオペラはとてもうまく行き、王〔シャルル 10 世〕が来て彼にありったけの愛想のいい言葉をかけてくれました。いま私たちは、王がロッシーニに何か良いご褒美を贈らせることを期待しています」と報告した（6月23日付）<sup>17</sup>。戴冠祝いの作品として作曲したので報酬は不要とロッシーニが述べたため、ロシュフコー子爵は 3000 フランの価値を持つセーヴル焼の磁器を謝礼に与えるよう王に進言（6月23日付の文書）、バローキは通常のオペラ座台本の 2 倍の報酬を得た<sup>18</sup>。ロシュフコー子爵は王によるレジョン・ドヌール勲章授与を望んだが、《ランスへの旅》の真価が判らぬシャルル 10 世はこれを認めなかった。

6月19日の初演に続いて7月23日に2回目、同月25日に3回目の公演がサル・ルーヴォアで行われた。8月2日にはベリー公爵夫人のための上演も予定されたがペッレグリーニの出演拒否でキャンセルされ、サラン市の火災犠牲者救済の慈善公演としてロッシーニが許可した9月12日の上演が最後となった（歌手はペッレグリーニからフィリッポ・ガッリに変更）。ロッシーニはこの4回で楽譜を引き揚げて出版を許さず、3年後の1828年にはみずから解体して楽曲の多くを《オリイ伯爵》に転用してしまった。それゆえロッシーニの許可なしに第三者が改作した二つの改竄版——その一つは1848年10月26日パリのイタリア劇場初演の《パリへ行こう？ またはプロンビエールの宿（*Andremo a Parigi? ossia L'albergo di Plombieres*）》、もう一つは1854年4月26日ウィーンのケルトナーターア劇場で皇帝フランツ・ヨーゼフとエリーザベトの結婚祝賀に上演された《ウィーンへの旅（*Il viaggio a Vienna*）》——を除いて《ランスへの旅》としての再演は一度も行われず、忘れ去られたのだった。

ロッシーニ自身が楽曲の多くを《オリイ伯爵》に転用したため《ランスへの旅》のまとまった自筆楽譜は存在せず、転用されなかった部分も散逸したが、1970年代に復元のための楽譜素材探求が集中的になされ、完全ではないものの最初の校訂譜がジャネット・ジョンソンによって作られ、1984年8月18日、ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティバル（以下 ROF と略記）にて 159 年ぶりの復活上演が行われた（会場はアウディトリウム・ペドロッチ。演出：ルカ・ロンコーニ、指揮：クラウディオ・アッパード。歌手は下記ディスク参照）。ロッシーニがみずから解体してオリジナルの痕跡を消したため、優れた部分だけが《オリイ伯爵》となって生き延びたと考えられてきたが、復元作業でそうした認識が間違いだったことが判った。転用されなかった部分も含めて《ランスへの旅》の総体は紛れもない傑作であり、フィリップ・ゴセットの言葉を借りれば、《オリイ伯爵》への改作転用はむしろ「オリジナルの重要な特徴をばかす作業」だったのである。それゆえ《ランスへの旅》の蘇演は傑作の発見であると同時に、これに続くロッシーニの全面的見直しの強力な推進力となったのだった。

ROF 蘇演に続く最初の再演は、1985年9月9日ミラーノのスカラ座で行われた。1988年1月20日にはウィーン国立歌劇場でも再演され、日本初演は翌89年10月21日にウィーン国立歌劇場の引っ越し公演でなされた（東京文化会館。以上すべてロンコーニ演出／アッパード指揮）。日本人による本邦初演は日本ロッシーニ協会が創立5周年を記念して2000年11月16日に北とびあ・さくらホールで行ない、2002年には2回の再演を行った（演出：マルチェッラ・レアーレ、指揮：松岡究）。なお、ROF は1992年と1999年の再演を経て、2001年からアッカデーミア・ロッシニアーナ修士生による「若者公演（Festival giovane）」として毎年上演しており、この作品を若く優秀なベルカント歌手の登竜門と位置づけている。



1984年 ROF 蘇演のプログラム

## 推薦ディスク

- ・ Deutsche Grammophon 415498-2 [2CD]（1984年8月の ROF 復活上演を音源とする。85年発売、外国盤〔国内盤はポリドール F70G 50277/8 として発売〕）

クラウディオ・アッパード指揮ヨーロッパ室内管弦楽団、プラハ・フィルハーモニー合唱団

- ①チェチーリア・ガスティア ②ルチア・ヴァレンティニーニ・テッラーニ ③レッツァ・クベリ  
④カーティア・リッチャレリ ⑤エドアルド・ヒメネス ⑥フランシスコ・アライサ ⑦サ  
ミュエル・レイミー ⑧ルッジェーロ・ライモンディ ⑨エンツォ・ダーラ ⑩レーオ・ヌッチ ⑪  
ジョルジョ・スルヤン ⑫オズラーヴィオ・ディ・クレディコ ⑬ラクエル・ピエロッチ ⑭  
アントネッラ・バンデッリ ⑮ベルナデッタ・マンカ・ディ・ニッサ ⑯ルイージ・デ・コラ  
ト ⑰エルネスト・ガヴァッツィ ⑱ウィリアム・マッテウッツィ

- ・ SONY SRCR 9327~8 [2CD]（1992年10月13~19日、ベルリン・フィルハーモニーの定期演奏会を音源とする。国内盤）

クラウディオ・アッパード指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン放送合唱団

- ①シルヴィア・マクネアー ②ルチア・ヴァレンティニーニ・テッラーニ ③ルチアーナ・セッラ  
④チェリル・スチューダー ⑤ラウル・ヒメネス ⑥ウィリアム・マッテウッツィ ⑦サミュエル・



レイミー ⑧ルッジェーロ・ライモンディ ⑨エンツォ・ダーラ ⑩ルーチョ・ガッロ ⑪ジョルジョ・スルヤン ⑫グリエルモ・マッテイ ⑬ニコレッタ・クリエル ⑭⑮バルバラ・フリットリ ⑯クラウディオ・オテッリ ⑰⑱ボジダール・ニコロフ

- 
- <sup>1</sup> 9月12日にパリを離れたとの情報はパリの新聞報道に基づく。(Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, vol.II., 21 marzo 1822 - 11 ottobre 1826.*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro Fondazione Rossini, 1996., p.275., n.2)
- <sup>2</sup> *Ibid.*, pp.293-295.
- <sup>3</sup> *Ibid.*, p.289.
- <sup>4</sup> 《ランスへの旅》全集版序文 pp.XXIV-XXV.
- <sup>5</sup> その他の該当人物やパロディも含め、《ランスへの旅》全集版序文 p.XXV.以下を参照されたい。
- <sup>6</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.392-393.[書簡 IIIa 218] なお、現存する2月18日までのロッシーニ書簡には仕事や作曲に関する記述が無く、次の手紙が4月11日付となる。
- <sup>7</sup> *Lettere e documenti, II.*, p.336.
- <sup>8</sup> *Ibid.*, pp.342-346., 348-350.
- <sup>9</sup> *Ibid.*, pp.351-353.
- <sup>10</sup> 《ランスへの旅》全集版序文 p.XXIV., n.14.
- <sup>11</sup> 次の論文で判明。Mario Corti, L'“Inno russo” del Viaggio a Reimsi., *Philomusica on-line* 9/I (2010) – Saggi
- <sup>12</sup> Nicole Wild., *Dictionnaire des théâtres parisiens au XIXe siècle.*, Aux Amateurs de livres, Paris, 1989., p.232.
- <sup>13</sup> スタンダール『ロッシーニ伝』(山辺雅彦訳) みすず書房, 1992., pp.396-398.
- <sup>14</sup> *Lettere e documenti, IIIa.*, p.397., n.4 の引用
- <sup>15</sup> *Lettere e documenti, II.*, pp.367-368., n.2 に引用あり。
- <sup>16</sup> *Rossini à Paris.*, Musée Carnavalet (27 Octobre - 31 décembre 1992)[ Catalogue rédigé par Jean-Marie Bruson], Paris, Société des Amis du Musée Carnavalet, 1992., p.74.
- <sup>17</sup> *Lettere e documenti, IIIa.*, pp.397-398.[書簡 IIIa 220]
- <sup>18</sup> *Lettere e documenti, II.*, pp.367-368.及び *Rossini à Paris.*, pp.72-73.